

見方考え方の成長を意識した小学校社会科の授業構成

——第4学年単元「くらしと水」の開発を通して——

The Theory of Social Studies Lessons for Developing Social Viewpoints in Elementary School:

The Development of a Teaching Plan for “Water and Our Life”

角田 将士・平田 早苗・平田 浩一
KAKUDA Masashi・HIRATA Sanae・HIRATA Koichi

I はじめに

近年、「小中連携」の動きなど、既存の校種を柔軟に捉えた教育のあり方が模索されている。しかし、このような制度的な検討とともに、授業づくりのレベルにおいても、校種を超えた「連携」を意識することが求められる。子どもたちは授業以前に「学びの履歴」を有しているし、授業後も「学び続ける」のだから、自分が担当している学年やそれぞれの校種の教育のみに意識を集中するのではなく、前後の関連性にも目を配ることも極めて重要な視点である。

社会科授業においては、単なる知識の伝達に留まるのではなく、下図¹⁾に示すように、社会的事象の本質や、事象どうしの関連性を読み解いていくための「レンズ」とも言うべき、「社会の見方考え方」を形成していくことが求められる。複雑な現代社会を読み解き、これからの社会のあり様を主体的に創造できる力を持った成熟した市民を育成しようとするところに、社会科に課せられ

た教育的役割を見出すことができる。

このような教科の理念を踏まえた上で、それぞれの学校段階においてはどのような授業づくりが求められるのだろうか。これまでの社会科教育学研究の成果を振り返ると、理論的な成果とともに具体的な授業のあり方を提案した実践的な成果についても数多く積み重ねられてきた。とりわけ、科学的な社会認識形成を志向した授業づくり研究は盛んで、小学校を対象にしたものも多い。それらの成果を通覧すると、多くの場合「小学校だからこそ」というよりは「小学校でも」という発想に基づいたものが多かったように思われる²⁾。小中高の一貫性を志向した研究³⁾もなされてきているが、各教師が目前の子どもたちの「今」に集中し、その時々により質の高い社会認識の形成を志向しようとする学校現場での実践場面から見れば、その後の子どもたちの成長や実態に即した内容というよりは、後の学校段階においても十分に実践可能な「むずかしい」内容を前倒しして教えるような授業づくりになっているのかもしれない。それゆえ、学会や研究会の場で紹介される先駆的な授業が、一般の教師たちにとっては、「うちの子たちには無理」「私立や附属だからできる代物」と映ったとしても無理はないだろう。

しかし、学習者である子どもたちは「学び続ける」のだから、それぞれの学校段階で、とりわけ小学校においては発達段階を十分に踏まえた上で、それから先の学習を見据え、今何を学ばせておくことが子どもたちにとってベストなのかを考えていくことの方が重要ではないだろうか。小学校においてはその学習が「どのような見方考え方

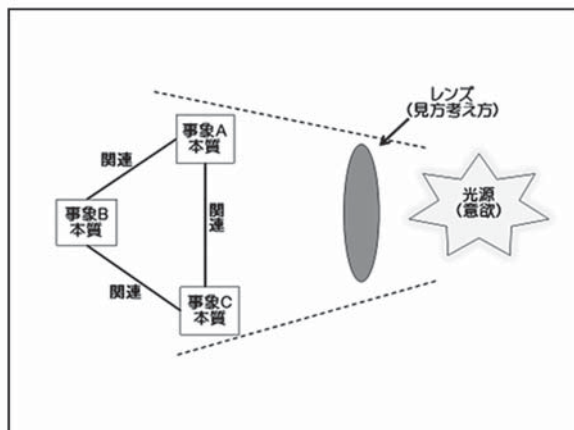


図1：社会科で育成する見方考え方のイメージ

につながっていくのか」を特に意識する必要があるだろうし、逆に中学校ではそれまでに形成されてきた見方考え方を「より成長させるためにはどうしたらよいのか」を特に意識する必要がある。

人は既存の見方考え方では説明がつかない事実に出合った時、疑問や矛盾を感じ、「なぜ？ どうして？」という知的好奇心が喚起され、その事実を包摂する形で見方考え方を成長させていくという。これは単に知識の量的な拡大を意味するものではなく、知識の質的な深まりを意味する「知識の変革的成長」⁴⁾と呼ばれるものであり、この変革的成長を促していくためには、これまでの学びやこれからの学びを意識した授業づくりが重要になってくるのである。

本稿においては、以上のような問題意識に基づき、小学校における社会科授業においては、その先の「学びの発展」を意識した上で、どのような授業づくりが求められるのかについて考えていきたい。その際、実際に学校現場で実践された授業（第4学年 単元「わたしたちのくらしと水」）の特質と課題を明らかにした上で、先述した視点から改善した授業プランを提案することで、先の課題にアプローチしていきたい⁵⁾。

Ⅱ 「学びの発展」を意識した小学校社会科における授業づくり

1 小学校社会科授業の特質

社会科という教科の原点は、子どもたち自らが「社会研究 (Social Studies)」を行っていくところにある。小学校における社会科授業の大きな特質は、平成20年版の学習指導要領の第3・4学年においても顕著にみられるように、地域で活躍する人たちの「工夫や努力」「願い」に焦点化した社会（地域）研究を行っていく点にある。様々な活躍している人たちの行為やその背後にある願いを共感的に理解することを通して、子どもたちが「自分たちもそうありたい」と思い、「地域社会に対する誇りと愛情」をもち、地域の発展に尽くす人材へと成長していくように促すことが指導の主眼となる。第5学年では日本の国土の様子と産業が、第6学年では日本の歴史と政治がそれぞれ学ばれることになっているが、そこでもそれぞれの

社会で活躍している人たちの「工夫や努力」や「願い」に寄り添った学習展開が期待されている。このようにして社会を構成する「個人」に着目をした社会のわからせ方を授業構成の軸に据えることが、小学校社会科授業の大きな特質であるといえる。

学習指導要領が提示する、人々の「工夫や努力」「願い」に着目した授業のあり方に対して、筆者の一人である角田は、そのような心理主義的な社会科授業では、私たちの生活を見えないところで規定している社会の仕組みや構造といったものに対するリアルな認識を育成できないとして、それぞれの人たちが行っている工夫や努力の背景にある、社会の仕組みや構造に目を向けさせるような、「社会の側からのわかり方」に基づいた授業構成こそが求められる、と提案してきた⁶⁾。しかし、そのような視点に基づく授業構成は、それぞれの単元レベルや、一時間レベルでの授業づくりを意識したものであり、「学びの発展」という視点から、社会科カリキュラム全体を通した見方考え方の成長を意識したものではなかった。例えば、同じように地域社会について学習させる第3学年と第4学年において、それぞれの学年でどのような見方考え方をどのように成長させていけばよいのか、またそれは第5学年以降の学習に向けてどのような発展を見据えたものであるべきなのか、といった点は十分に意識したものではなかった。

学習指導要領が提示するカリキュラム自体を相対化し、見方考え方の成長を軸とした新しいカリキュラム像の提案という方向性⁷⁾も考えられるが、学校現場での実現可能性がより高まることを期待して、本稿においては、学習指導要領が提示するカリキュラム（内容配列）に沿いながら、そこで小学校社会科がこだわっている（こだわってきた）、人々の「工夫や努力」「願い」に対する見方考え方をどのように成長させればよいのかといった方向性で論を進めてみたい。

2 工夫や努力、願いの「質」への着目

一言で、人々の行っている「工夫や努力」「願い」といっても多様である。例えば、スーパーマーケットで働く人たちのそれと、水道局や警察・消防で

働いている人たちのそれとでは、質が異なっているように。

スーパーマーケットなどの一般企業で働いている人たちは、限られた資源（労働）で得られる利益を最大限にすることを願って、様々な工夫や努力をしよう。小学校社会科授業でもよく取り扱われるように、スーパーマーケットにおいては、商品陳列の仕方、広告の作り方、安売りのタイミングや内容・・・等々、販売者は様々な工夫や努力をすることによって、可能な限りの利益を得ようとしている。

一方、スーパーマーケットやコンビニなどの立地を考えていく際には、「人口が少ない」という条件は一般的には不利な要因とされるであろう。しかし、人口が少ない過疎地にも交番や消防署は立地しているし、上水道や、時には下水道も整備されている。つまり、水道局や警察・消防などの公的機関で働く人たちの工夫や努力は、そのような公的サービスを、公平かつ安定的に提供することを志向したものになっているといえる。

このように、工夫や努力、願いといっても、その「質」には違いがある。この「質」の違いに着目をすれば、小学校社会科における見方考え方をどのように成長させればよいのか、その道筋が見えてくるのではないだろうか。

表1をご覧ください。これは京都市内の小学校で使用されている第3・4学年向けの副読本である『わたしたちの京都3・4年上・下』（平成27年度版）の目次構成である。おおよそ上巻が第3学年に、下巻が第4学年に対応している。第3・4学年は地域社会についての学習となっているため、それぞれの地域では検定教科書の他に、副読本としての地域教材が作成されている。京都市の場合、『わたしたちの京都』がそれに該当し、その内容は学習指導要領に準拠したものになっている。

第3学年においては、導入のまち探検を通じた自分たちの校区の様子調べ、地図記号などの技能的な学びの後には、「商店」「農家／工場」と「昔と今」についての学習から構成されていることがわかる。このうち、「昔と今」に関わる単位については、歴史的な学習の初歩的な段階として、第4

表1：副読本『わたしたちの京都』の目次構成

上巻	わたしたちのまち
	1 学校の周りの様子
	2 京都市のまちの様子
	わたしたちのくらしとはたらく人びと
	1 商店のはたらき
2 (a) 工場で作られるもの	
2 (b) 農家で作られるもの	
地域や生活のうつり変わり	
1 昔を伝えるもの	
2 地域の人びとが受けついできたもの	
下巻	住みよいくらしをささえる
	1 くらしと水
	2 (a) くらしとごみ
	(b) 使った水のゆくえ
	安全なくらしを守る
	1 火事をふせぐ
	2 事故や事件をふせぐ
	きょう土をひらく
	1 用水のけんせつ～琵琶湖疎水～
	わたしたちの京都府
	1 地図を広げて
2 京都府の様子	
3 古くから受けつがれてきた産業のさかんな宇治市	
4 豊かな自然に囲まれている南丹市美山町	
5 京都府と各地のつながり	

（筆者作成。なお、aとbは選択可能とされている。）

学年での「用水のけんせつ～琵琶湖疎水～」や第6学年での日本歴史の学習への発展を考えなければならないが、この点については、別の機会に譲りたい。以下、本稿において考えていきたいのは、「商店」「農家／工場」の単位においてはどのような見方考え方を育てるべきか、またそれはなぜか、という点である。

先述したが、「商店（スーパーマーケットやコンビニなど）」で働く人たちは、基本的に収益を最大化するための工夫や努力を行っている。一方、少しでも有利な価格で販売できるように作物の出荷時期をずらすなど、「農家」で働く人たちの工夫や努力も、その点から説明可能である。また、「工場」においてたくさんの製品を一度に大量に生産するために機械化を行っていることや、材料や製品の輸送に有利なように、交通の便の良い場所に工場が立地していることなども、「収益の確保」

という点から捉えることができる。そのように考えれば、第3学年で子どもたちに捉えさせたい見方考え方の中核とは、「商店や農家（工場）で働いている人たちは、収益を確保するという願いを実現するためにどのような工夫や努力を行っているのか」という点に求めることができよう。

上記のような見方考え方を、第3学年の間に確実に捉えさせることができているならば、続く第4学年においては、それをさらに成長させることができる内容配列になっていることがわかる。

第4学年に配列された内容のうち、「住みよいくらしをささえる」と「安全なくらしを守る」は、基本的に水道やゴミ、消防・警察といった公的機関の学習となっている。この点についても先述したように、そこで働く人たちの願い、工夫や努力のあり方は、第3学年で捉えた商店や農家（工場）で働く人たちのそれとは質的に異なったものであった。第4学年においては、第3学年で捉えた見方考え方では、説明がつかない働き方をしている人たちについての学習となっているわけである。そのため、「どうして公的機関で働く人たちは、収益確保をめざさないのか」「めざさないのであれば、何を願って仕事に取り組んでいるのか」といった、「知識の変革的成長」を意識した問いを提示することができる。

以上のように、見方考え方の成長を意識しておけば、その後の学年における学びへの発展も期待できる。スーパーマーケットなどの一般企業で働く人たちの工夫や努力について考えることは、「我が国の工業生産に従事している人々が、消費者の多様な需要にこたえ、環境に配慮しながら、優れた製品を生産するために様々な工夫や努力をしている（小学校第5学年）」⁸⁾といった見方考え方や、「企業は市場において、公正な経済活動を行い、消費者、株主や従業員の利益を増進させる役割を担っている（中学校公民的分野）」⁹⁾といった見方考え方へとつながっていくことが見えてくる。

一方で、水道局のような公的機関で働く人たちの努力や工夫について考えることは、「飲料水の確保については、需要の増加に対して、水源を確保・維持するために森林が保全されていること、ダムや浄水場などの建設が計画的に進められてい

る（小学校第4学年）」¹⁰⁾という見方考え方を獲得させることになるだろうし、それは「国民の生活と福祉の向上を図るために、社会資本の整備、公害の防止など環境の保全、社会保障の充実、消費者の保護など、市場の働きにゆだねることが難しい諸問題に関して国や地方公共団体が果たしている役割（中学校公民的分野）」¹¹⁾についての見方考え方、つまり「市場の失敗と政府（地方公共団体）の経済的役割」についての見方考え方へと発展していこう。

もちろん小学校の時点で正確な理解を求める必要はないだろう。上記のような「学びの発展」を見据えて、商店や農家の働きに見られるような収益や効率を意識した工夫や努力と、水道局や消防・警察の働きに見られるような公平性や安定性を意識した工夫や努力など、それぞれで扱う工夫や努力、願いの「質」の違いに気付けるような授業づくりが求められる。

Ⅲ 授業実践「わたしたちのくらしと水」の特質と課題および改善プラン

1 実践された「わたしたちのくらしと水」の特質と課題

これまで述べてきた理論的な枠組みを基に、具体的な授業イメージを提示してみよう。

資料1に示した実践は、筆者の一人である平田早苗が、平成26年5月に、広島市立N小学校の第4学年を対象に実践した、単元「わたしたちのくらしと水」（全10時間）のうち、単元後半の第9時の学習展開を示したものである。

この実践は、「人々の生活にとって必要な飲料水を確保するための事業は、計画的・協力的に進められていることを理解し、人々の健康な生活や良好な生活環境の維持向上のために協力しようとする態度」の育成を期したものであった。このようなねらいのもとで授業が実践されたのは、学習指導要領における第3学年及び第4学年の「内容」である「飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理と自分たちの生活や産業とのかかわり」の学習を通して「人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつよう

資料1：実践された「わたしたちのくらしと水」の学習展開（本時9時間目／全10時間）

【目標】人々の生活にとって必要な飲料水を確保するための事業は、計画的・協力的に進められていることを理解し、人々の健康な生活や良好な生活環境の維持向上のために協力しようとする態度を身に付ける。

	主な発問	児童に獲得させたい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> 今日はまずA・Bの2つのコップに入った水を飲んでみて下さい。AとBのコップの水、どちらが美味しいでしょうか。 	<ul style="list-style-type: none"> Aの方が美味しい（児童32名中16名、保護者11名中6名） Bの方が美味しい（児童32名中16名、保護者11名中5名） Aのコップの水は広島市の水道水、Bのコップの水はサントリーのミネラルウォーター「奥大山の天然水」。
展開Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ミネラルウォーターの値段は、水道水の1000倍です。（水道水2L＝0.2円（平均）、ミネラルウォーター2L＝200円（実勢価格））そんなに高いミネラルウォーターを、どうして多くの人は買うのでしょうか。 広島市の水道水も「飲んでみんさい広島の水」という商品名で売られています。なぜ広島市の水道水はペットボトルで売られているのでしょうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ペットボトルに入ったミネラルウォーターは、水道水よりも美味しいのだと思う。 人々はより安全な水を求めているのだと思う。 広島市の水道水もミネラルウォーターと同じように美味しくて、安全だから。（実際に飲み比べても、ミネラルウォーターと同じように美味しく感じた）
展開Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> なぜ広島市の水道水はペットボトルで売られるほど、美味しくて、安全なのでしょう。浄水場の見学を振り返ってみよう。 	<ul style="list-style-type: none"> 水道水はそこで働く人々の工夫や努力に支えられている。 <ul style="list-style-type: none"> 浄水場で働いている人たちは、24時間交代でいろいろな設備を使って美味しい水をつくっている。 浄水された水で魚を飼って、常に安全性を確かめている。 水道水は人々の健康で安全な生活に役立っている。 <ul style="list-style-type: none"> 浄水場できれいにされた安全・安心な水が、学校や家庭、工場に届けられている。 広島市の水道水もミネラルウォーターと同じくらい美味しくて、安全で安心だからこそ、ペットボトルで売ることができる。
終結	<ul style="list-style-type: none"> ◎安全で安心な広島市の水を今後も守っていくためには、どうしたらよいでしょうか。 ◎そのために私たちにできることは何だろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎浄水場で水をきれいにしていく必要がある。浄水場で働く人たちにこれからもがんばってもらう必要がある。 ◎取水している太田川や、太田川の水源としてきれいな水を注ぎ続けてくれている中国山地の「ゆたかな森林」を守り続けていく必要がある。水源の森を守る活動をしている地域の人たちもいる。 ◎浄水場で働く人たちや、水源の森を守り続けている地域の人たちの協力があって広島市の水道水は守られている。次の時間は、広島市の水道水を守るために、私たちは何ができるかということについて、しっかりと考えてみよう。

（平成26年5月のN小学校での実践を基に筆者作成。当日は授業参観日でもあったため、保護者の協力も仰いだ。）

にする」という「目標」の達成につなげるためである。

この実践においては、まず市販のミネラルウォーターと水道水を実際に飲み比べてみて、ミ

ネラルウォーターと水道水とでは「美味しさ」の点で大差はないことを確認している。そして、そんなに美味しい水道水を生み出している浄水場で働く人たちが、どのような工夫や努力をしていたのかを、実際に見学に行って得て来た情報や教科書等で確認できる内容を基に振り返っている。さらに、水源の森を守る活動に取り組んでいる人たちの活動にも触れることで、多くの人たちの協力の上に飲料水が確保されていることを理解させている。その上で、きれいな水や水源の森をこれからも守り続けていくために、自分たちにもできることはないかを考えさせることで、地域社会の一員としての意識と自覚を培おうとしている。また、実際にミネラルウォーターと水道水を飲み比べてみるなど、体験的な学習を取り入れ、実感を伴った理解を促す工夫も見られ、学習指導要領が示す目標を効果的に達成しようとしている。そういった点で意義ある実践であったといえる。

その一方で課題もある。この授業は「個人の側からのわかり方」に終始し、公的サービスとしての飲料水の供給事業のもつ意味に迫れていない。この実践は、あくまでも「水道水の美味しさとその秘密」の理解が主眼となり、安心して安全な水道水が供給されるしくみについて理解することに留まってしまっている点に課題があるといえる。

2 改善の方向性

改善プランでは、浄水場で働く人たちの工夫や努力、願いを「公的機関」で働く人たちのそれとして意味付け、子どもたちの見方考え方を成長させていくために、第3学年で獲得した「収益を確保する」という一般企業における工夫や努力、願いとの対比を意識したい。その意味で、商品としてのミネラルウォーターと水道水の比較は、効果的な学習となろう。ただし、改善プランにおいては、両者の美味しさとその秘密に着目するのではなく、両者の製造過程の違いにまずは着目をさせたい。Web ページ等で確認すると、例えば、サントリーのミネラルウォーターの場合、「地下から汲み上げた天然水は、一切外気に触れることなく、パイプの中を通ってろ過装置へ送られ、きめ細やかなフィルターを通して天然水はろ過され、

ミネラル分や味わいを損なうことなく、高温で瞬間的に殺菌され、ボトリングされる」というように、その製造過程について紹介されている。「地下数百メートルから汲み上げる」「一切外気に触れさせない」「瞬間的に高温殺菌する」といった工夫や努力は、浄水場には見られないものであろう。そこで「メーカーは『より美味しい水』を作っているのに、なぜ浄水場で働く人たちはもっと美味しい水をつくろうとしないのか」と問いかけることによって、両者の思惑の違いに着目させたい。

その後、水道水の用途について確認し、そのほとんどが飲料用以外に用いられていることを確認する。風呂やトイレで使用している水の量をイメージすれば、ミネラルウォーターのように価格が、2ℓ = 200円もしてしまうと、水道料金が今よりも跳ね上がってしまうことに気づかせたい。

加えて、商品としてのミネラルウォーターの場合は、TVのCMなど、積極的な宣伝をして多くの人たちに買ってもらうための努力をしているのに対して、水道局の人たちは水道水の美味しさをPRする一方で、水不足になる（その恐れがある）と「節水」を呼びかけるなど、使用を抑えるための働きかけをしている。ミネラルウォーターの場合と比較して、「どうして節水を呼びかけるのか」と問うことで、浄水場や水道局で働く人たちは、単に美味しく安全な水を届けるだけでなく、それを「安定的に」供給することをめざしていることに気づかせたい。

以上のように、メーカーの工夫や努力の意味を捉えさせる一方で、それでは説明がつかない公的機関の工夫や努力の意味を捉えさせることで、知識の変革的成長による見方考え方の成長を促したい。

続く「3 改善プラン」において、実際に開発した授業プランを提示しよう。なお、このプランは、京都市内の小学校での実践を想定して開発した。そのため、単元名についても『わたしたちの京都』に準拠して「くらしと水」とした。

3 改善プラン：第4学年単元「くらしと水」

(1) 主題 小学校社会科 第4学年単元「くらしと水」

(2) 単元の目標

- 1) 水道水がどのようにしてつくられ、私たちの元に届けられるか、見学などを通じてそのしくみについて理解する。
- 2) ミネラルウォーターとの比較を通して、水道水をつくる事業について、以下の事柄を説明できるようにする。
 - ・ミネラルウォーターを製造・販売をしている人たちは「消費者の需要に応えた優れた製品」を生産するために、工夫や努力をしている。
 - ・ミネラルウォーターを製造・販売している人たちは「できるだけ多くの消費者に製品を買ってもらうことで、多くの利益を獲得する」ために、製品の広告に力を入れている。
 - ・浄水場や水道局で働く人たちは「安全・安心な水を、安価で供給する」ために、工夫や努力を行っている。
 - ・浄水場や水道局で働く人たちは「水を安定的に供給する」ために、しばしば節水を呼びかける。
- 3) 水道水をつくる事業のように、公的機関で働く人たちの工夫や努力、願いは、企業で働く人たちの工夫や努力、願いとは質的に違ったものであることを理解する。
- 4) 水道水をつくる事業は、地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解する。

(3) 単元計画（全10時間）

第1 - 2時・・・くらしの中で使われる水

第3 - 4時・・・わたしたちが使う水道水

第5 - 9時・・・水道水が送られてくるまで（浄水場の見学を含む）

第10時・・・これからのくらしと水

(4) 本時の学習展開（本時9時間目／全10時間） *本時は主として目標2) および3) の達成をめざす

	発問	教授・学習活動	資料	児童に獲得させたい知識
導入	<p>・今日はまずA・Bの2つのコップに入った水を飲んでみて下さい。AとBのコップの水、どちらが美味しいでしょうか。</p>	<p>T: 資料を示して発問する。 P: 答える。 T: 説明する。</p>	①	<p>・Aの方が美味しい。 ・Bの方が美味しい。 ・Aのコップの水は京都市の水道水、Bのコップの水はサントリーのミネラルウォーター「奥大山の天然水」である。</p>
展開I	<p>・ミネラルウォーターの値段は、水道水の1000倍です。(水道水2L = 0.2円(平均)、ミネラルウォーター2L = 200円(実勢価格)) そんなに高いミネラルウォーターを、どうして多くの人は買うのでしょうか。</p>	<p>T: 資料を示して発問する。 P: 予想する。</p>	②	<p>・水道水よりも、より美味しく安全な水を手に入れたいからではないだろうか。</p>
	<p>・本当にペットボトルに入ったミネラルウォーターは、美味しく安全なのでしょうか。</p>	<p>T: 発問する。 P: 資料を見て答える。</p>	③	<p>・サントリーのWebページには、「地下から汲み上げた天然水は、一切外気に触れることなく、パイプの中を通して、ろ過装置へ送られます。そして、きめ細かいフィルターを通して天然水はろ過され、ミネラル分や味わいを損なうことなく、高温で瞬間的に殺菌され、ボトリングされます」などと書かれてある。</p>

展開Ⅰ	<p>○なぜ人々はミネラルウォーターを買うのでしょうか。</p>	<p>T: 発問する。 P: 資料を見て答える。</p>	<p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミネラルウォーターを作っている工場では、様々な設備を用いてろ過・殺菌を行い、味わいを損なうことなく美味しい水を生産している。 ・サントリーは工場で作っている水をより多くの人たちに飲んでほしいから、TVでCMを流したり、広告をつくったりして宣伝をしている。 <p>○人々はそのような宣伝を通してサントリーの水のを知ることができるし、「より美味しく安全な水」を求めて、高いお金を払ってまでミネラルウォーターを買っている。</p>
展開Ⅱ	<p>○サントリーは「より美味しい水」をつくっているのに、なぜ京都市の水道局は、もっと美味しい水を作らないのでしょうか。</p> <p>・京都市の水道水は、どのような使われ方をしていましたか。確認しよう。</p> <p>・京都市の水道水がミネラルウォーターのように手間暇をかけてつくられていたら、どうなりますか。</p> <p>・水道料金がミネラルウォーターのように高くなってしまうとどんな困ったことが起こるのでしょうか。</p>	<p>T: 資料を示して発問する。 P: 予想する。</p> <p>T: 発問する。 P: 資料を見て答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 資料を見て答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p>	<p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以前に学習したように、水道水も様々な設備で浄水されているが、ミネラルウォーターが作られる過程とは全く異なっている。しかし、その理由についてはわからない・・・。 <p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭での水道水の使われ方は、28%がトイレ用、24%がお風呂用、23%が炊事用、17%が洗濯用、その他が8%となっており、供給されている水道水のほとんどは飲用以外の用途に用いられている。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどが飲料水以外の使われ方をしているので、ミネラルウォーターのように美味しさだけを追求してしまうと、水道料金が今よりも高くなってしまわないか（ミネラルウォーターの値段は水道水の約1000倍）。 <p>・お風呂をがまんしたり、家で水道水を利用しなくなる人が増えるのではないだろうか。</p> <p>○みんなが安心して利用できなくなるから、「安い料金でも利用できる」水をつくっているのではないか。</p>
展開Ⅲ	<p>・水道水とミネラルウォーターとでは他に何か違いはありますか。</p>	<p>T: 発問する。 P: 資料を見て答える。</p>	<p>④ ⑦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミネラルウォーターの場合は、積極的な宣伝を行うことで、多くの人たちに飲んでもらう努力をしていた。一方、水道水の場合は、雨が少なく暑い時期になると「節水」を呼びかけている。

<p>展 開 Ⅲ</p>	<p>・ どうして水道局は水道水を使いすぎないように、「節水」を呼びかけるのでしょうか。</p> <p>・ ミネラルウォーターと水道水とでは、水をつくっている人たちの思いにどのような違いがありますか。</p> <p>○水道水が私たちのところに届くまでに見られる様々な工夫や努力は、何のために行われているのだと思いますか。</p>	<p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 発問する。 P: 答える。</p>	<p>・ 雨が少ない時期に、みんなが使いすぎて水が足りなくなると困るから。</p> <p>・ 「いつでも安心して利用できる」ようにするため。</p> <p>・ ミネラルウォーターをつくっている人たちは「多くの人たちにできる限りたくさん飲んでもらいたい」と思っている。水道局や浄水場で働いている人は、「みんなにいつでも安心して利用してもらいたい」と思っている。</p> <p>○浄水場や水道局で働いている人たちは、飲料水を「安価に」「安定的に」供給するために、様々な工夫や努力をしている。</p>
<p>終 結</p>	<p>◎ミネラルウォーターと水道水の場合とでは、働いている人たちの「工夫や努力」や「願い」にどんな違いがあるといえますか。</p> <p>・ 次の時間はまとめとして、みんなが安心して水道水を利用できるようするために、私たちには何ができるのかということについて考えてみよう。</p>	<p>T: 発問する。 P: 答える。</p> <p>T: 発問する。</p>	<p>・ ミネラルウォーターをつくる人たちは、多くの人たちに飲んでもらうことで多くの「利益」を得ようとしている。</p> <p>・ 水道局や浄水場で働く人たちは、みんなに「安心して（味・価格・何時でも）」利用してもらえるように様々な工夫や努力をしている。</p> <p>◎ミネラルウォーターと水道水とでは、同じように美味しい水をつくるために様々な工夫や努力がなされているが、それぞれの願いは異なっている。</p> <p>（水源の森を守り続けるための活動などにも触れ、安全で美味しい水道水を確保するために、私たちにも協力できることについて話し合えるように準備をする）</p>

【授業資料】

- ① A のコップ：京都市の水道水、B のコップ：ミネラルウォーター（サントリー 奥大山の天然水）
- ② 水道水とミネラルウォーターの価格比較（京都市の水道料金とミネラルウォーターの実勢価格を基に作成する）
- ③ サントリー天然水 Web ページ（<http://www.suntory.co.jp/water/tennensui/source/index.html>）
- ④ サントリー天然水 CM（<http://www.suntory.co.jp/water/tennensui/cm/index.html>）
- ⑤ 「京都の水道水入りボトル缶『疏水物語』8万本突破」
（烏丸経済新聞 Web ページ：<http://karasuma.keizai.biz/headline/1261/> より。）
- ⑥ 水道水の家庭での使われ方（（社）日本水道協会「水道のあらまし2008」より。）
- ⑦ 香川県の節水 PR（<http://www.pref.kagawa.jp/kankyo/mizu/kgwmizu/kagawa/10.htm>）

Ⅳ おわりに

近年、社会科教育学の分野では、教師のゲートキーピングという概念が注目を浴びている¹²⁾。これまでの研究においては、社会科カリキュラム、社会科授業として、よりふさわしいあり方を求め、学習指導要領を相対化し、代替案を提示する研究がメインストリームをなしてきた。しかし、そのような研究の傾向は、現実に学習指導要領が存在し、法的拘束力を持つものとして準拠することを求められる学校現場の教師たちにとっては、遠い世界の話と捉えられがちであった。そのようなカリキュラム論や授業論についての理論的な議論¹³⁾はそれとして大切にしつつも、重要なのは、現場の教師自らが社会科という教科に課せられた教育的役割や目標を意識した上で、その目標を達成するために、教えるべき内容を再構成するなどして、可能な限り中長期のスパンでのカリキュラムをいかにしてデザインしていけるか、という点である。ゲートキーピング論とは、そのような教師による調整（ゲートキーピング）の質こそが、社会科授業の質を左右する、というものである。

本稿において、あえて学習指導要領が示す内容の配列を前提としたのは、上記のような理由による。現場の教師たちに求められるのは、学習指導要領が示す内容群を前提としつつも、その中でどこまでの創意工夫を施すことができるのかということであり、そのためには、どのような目標を意識して単元や授業づくりを行うのかということについての自分なりの見解を持つことが重要であると考えている。本稿で述べてきたように、小学校社会科の場合、「学習の発展」や「見方考え方の成長」を意識することによって、学習指導要領が示すそれぞれの内容を関連させることができるし、そこにこそ質の高いゲートキーピングの可能性が秘められていると考える。提示した改善プランはその一例である。

【註】

- 1) 大杉昭英他『新中学校教育課程講座 社会』ぎょうせい、2000年、pp.163-165、を参照。
- 2) 例えば、小学校社会科の代表的な授業開発研究としては、下記のものが挙げられる。
 - ・岡崎誠司『変動する社会の認識形成をめざす小学校社会科授業開発研究』風間書房、2008年。
 - ・岡崎誠司『見方考え方を成長させる社会科授業の創造』風間書房、2012年。
 これらの著作に見られる岡崎氏の主張自体に異論があるわけではないが、提案されている授業は「フードシステム論」などの社会科学的な理論の理解と援用を求めるものになっており、中学校においても十分に実践可能であると思われる。
- 3) 例えば、山田秀和「小・中・高の歴史教育における段階性－現代社会理解のためのストラテジー－」『社会科研究』第75号、2011年。
- 4) 森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書、1984年。
- 5) 本稿は、角田将士「見方考え方の成長を意識した社会科授業づくりの視点」『社会科navi』日本文教出版、2014年、pp.8-9、において提示した理論的枠組みと授業イメージに検討を加え、精緻化したものである。
- 6) この点については、下記の論稿を参照されたい。
 - ・角田将士・片上宗二「小学校社会科学習の改善（1）－「社会の側からのわかり方」に基づいた5年単元『日本の酪農』の開発－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、第53号、2004年。
 - ・角田将士「小学校社会科学習の改善（2）－4年単元『美山町を通して過疎化を考える』の開発－」『立命館産業社会論集』第44巻第4号、2009年。
- 7) このような視点から日本公民教育学会では「現代社会の課題を考察する見方や考え方を身に付けさせる公民教育カリキュラムの再構築」というテーマでプロジェクト研究を進めている。
- 8) 『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社、2008年、p.64。
- 9) 『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版、2008年、p.105。
- 10) 同上書7、p.36。
- 11) 同上書8、p.106。
- 12) スティーブン・J・ソントン（渡部竜也・山田秀和・田中伸・堀田論訳）『教師のゲートキーピング－主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて』春風社、2012年。
- 13) 学習指導要領を相対化し、あえて「理想的な」あり方を探ることの意義については、高橋哲哉『教育と国家』講談社現代新書、2004年、pp.191-193、203-206、を参照されたい。